

巻 頭 言



開院初年度年報発刊に寄せて

安佐医師会病院 病院長 土手慶五

令和5年4月1日に可部南、旧安佐市民病院北館を改装した安佐医師会病院が開院しました。私たちの病院の活動を、地域の方々、地域包括センター、ケアマネジャー、訪問看護師、社会福祉協議会、民生委員、薬剤師会、歯科医師会、医師会、地域住民の生活健康を支援しておられる方々に広く知っていただくために、病院開設の礎を残すために、この年報を作成いたしました。

日本人の健康寿命は世界一です。そして、令和5年、人口動態で、日本人女性の死因の第一位は、老衰となりました。しかし、老衰は医学部の授業では習っていません、医師国家試験にもできません。老衰と病気を明確に区別するガイドラインもエビデンスもありませんし、それは、国が決めるものでもありません。

“三度肱を折りて良医為るを知る”といいますが、肱なら三度折って経験することはできますが、老衰、老いることは三度は経験できません。「できなくなること」を少しは経験できますが、「認知症」と診断、告知された人の心は経験することはできません。そんな時代の要請に応えるようにできたのが、「地域包括ケア病棟」であり、「緩和ケア病棟」なのでしょう。

私を含めて多くの職員は高度急性期で手術をする病院からやってきた人たちです。病院完結でなく地域完結、言うのは簡単ですが、実際はどうしても高度急性期の習性は抜けません。

かかりつけ医、訪問看護師、ケアマネジャーの視点でどのように取り組むか、その現場をどのように見て歩くか。

そして、その地域を支えている人から、どう信頼をかちとるか。脱皮がどうしても必要です。

脱皮していくことを目指して、殻を脱ぎ捨てることをめざして、始めた、私たちの思い、努力が、10年後に、「あ～、こんなことしてたんだ」と笑っていただけるように今を記録してみました。